
Replica ~ やさしい嘘 ~

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Replica やさしい嘘

【Nコード】

N8933A

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

梅雨晴れの空がまぶしい、六月のある日。僕は父に連れられて、隣市の総合病院を訪れた。そこで待っていたのは、忘れがたい邂逅と奇跡だった。 【前後編】

Replica やさしい嘘 (前)

梅雨晴れの青空に目がくらむような、六月の終わり。

「会ってほしい人がいる」

そう言って父が僕を連れてきたのは、隣市にある総合病院だった。つんと漂う薬品のおい。ひっそりと死を待つような重い静けさに満ちた廊下の奥に、その病室はあった。

小さな個室だった。

ゆづこ
「由布子」

ドアを開けた父の肩越しに、ベッドに横たわっている女性が見えた。

父の呼びかけに、女性はなんの反応も寄越さなかった。枕に頭を乗せて、ぼんやりと、どこか虚ろなまなざしをさまよわせていた。

「由布子」

二度目でようやく女性はこちらを向いた。

髪が生え際に白いものが窺える。父とそう歳は変わらない。透明な瞳がガラスのように父を映し、やがて女性はゆったりと微笑んだ。

「……宗さん」

父の名前は宗介だった。

今はもう父の古なじみしか口にしない呼び方に、僕は違和感を覚えた。

「どうだ、調子は。ちゃんと食ってるか？」

「ええ……」

パイプ椅子に腰かけながら、父は由布子さんに笑いかけた。由布子さんは嬉しそうに、差しのべられた父の右手を両手で包みこんだ。

「お仕事忙しいのに、わざわざごめんなさいね」

「いや、いいんだ。気にするな」

優しい声。

労るようなその響きを、僕は滅多に聞いたことがなかった。

ふと、由布子さんの瞳が僕を捉えた。

「…………千洋^{ちひろ}？」

そして、呼びかけられた。

父の手を片手で包んだまま、彼女はもう片方の手を僕に向かって伸ばした。

「千洋、来てくれたのね」

やわらかな笑みが広がる。

だけど僕はその手を取ることができず、ずっと突っ立ったままです。

「千洋」

今度は父が呼んだ。

僕は驚いて父を見た。

「どうした、千洋」

父は寡黙な目で、由布子さんの手を取るよう促してきた。

まるで見えない糸で操られるように、すると僕の手が彼女の手を包みこんだ。

自然な行動だった。

「千洋」

純粹な喜びに染まった目が見上げてくる。まるで子どものような目だ。

それだけで、由布子さんがここにはいないだれかを見つめていることがわかった。

「父さん！」

飲みものを買いにいくと病室を出た父を、僕はとっさに追いかけた。

まるで僕が来るのを待っていたかのように父は振り返った。

「…………どういことだよ」

返事はない。

それでもかまわずに続けた。

「あの人だれ？ 僕にだれのフリさせてんの？」

千洋なんて名前、僕は知らない。

父は小さな、けれど重たげなため息をついた。

「……母さんが後添いだってことは、知ってるな」

僕は頷いた。頷いて……その言葉にこめられた意味に気づいた。

「あの人、父さんの最初の……」

父は困ったような顔をした。

「母さんに出会う二年ほど前だよ、別れたのは」

父と母はひと回り近く歳が離れている。僕は父が四十を過ぎてからできた子どもだった。

その前に、他に子どもがいてもおかしくない。

「千に太平洋の洋と書いて、『ちひろ』と読んだ」

僕とは十五歳離れた兄だったそうだ。

「生きていれば三十二だ」

父は廊下の談話スペースに置かれた長椅子に腰を下ろすと、呟くように言った。

「ちょうど今のおまえぐらいのときに、な」

「……僕は会ったことあるの？」

「いいや、ないよ。千洋はおまえを知っていたけど、会わせてほしと言われたことはなかった」

会ったこともない兄。

どうして父がぼくをここに連れてきたのか、ようやくわかった気がした。

「由布子さん……もう長くないの？」

「……ああ」

父は俯いた。

それでも、床に滴ったものは、はっきりと見えてしまった。

「あいつの時間は、十五年も前に戻っちまったんだよ」

廊下に僕以外の人影はなかった。

古いもののなか、長椅子の座り心地はあまりよろしくない。それでもずっと立っているよりはマシだ。

窓から射す白い陽が落ちて、僕の影が伸びる。陽射しのきつかった外に比べて、ここはずいぶん涼しかった。

父は病室に戻った。

なんとなく居づらくて、結局出てきてしまった。さびしそうな由布子さんの顔が脳裏にちらつく。

どうしろっていうんだ。

何を話し、何をすればいいんだ。僕は千洋じゃないから、千洋のことなんてわからない。

息が詰まりそうだ。

ついてくるんじゃないかったのかもしれない。

「隣、いい？」

ふと足元に僕のものではない影が落ちていた。履き古されたスニーカーが見える。

「どうぞ」

「ありがとう」

どこかで聞いたような声だ。

そんなことを頭の隅で思いながら、僕は少し間を空けて座った、見知らぬだれかの足元を見つめていた。

「見舞い？」

軽い調子で訊かれ、僕は「ええ」と頷いた。

「俺もだよ」

やっぱり、聞き覚えがある。

だけど僕が答えを探し当てるよりも早く、向こうが話し出していた。

「俺はね、おふくろの見舞いなんだ」

「……そう」

「長いこと入院してて……だけど俺、ずっと来れなくてさ」
「どこで聞いたんだろう？ 思い出せない。」

「きみは？」

「……似たようなもん」

「なんだか敬語で答えるのも億劫になって、つい地が出た。」

「……なあ」

「何？」

「きみは……ずっと俺を知らなかったんだよな」

「ため息をつくような声だった。」

「僕は少しだけ顔を上げた。」

「濃紺のスラックスと、白いYシャツ。どこかの学校の夏服だった。」

「俺は、知ってたよ」

「ひんやりとした空気の中で、相手の夏服は爽やかな印象を与える。アイロンがきいていて汚れもないのは、おろしたてだからだ。」

「会おう会おうって思ってるうちにさ、会えなくなっちゃったけど。」

「……なんとなく、気恥ずかしくって」

「窓明かりがほんのりとした色に染まる。陽が傾きかけていることを僕は知った。」

「今日はありがとう」

「僕は完全に顔を上げた。別に上げなくたってよかったけれど、それでも上げずにはいられなかった。」

「そこには。」

「……千洋」

「僕が、いた。」

「鏡の向こうに見慣れた自分の顔がそこにあった。服装が違っていい。それだけだった。」

「驚いたなあ」

「千洋は目を細めた。」

「ここまでそっくりだとは……俺も思わなかった」

同じ顔でも、笑い方は由布子さんに似ている気がした。

「……なんで」

「おふくろを迎えに」

笑顔のまま、千洋は答えた。

「でも、俺はあそこへは行けない」

千洋の指が、由布子さんの病室のドアを指し示す。

僕と同じ瞳が、けれども僕の知らない光を湛えていた。

「……お願い、できるかな」

何をすべきか。

それが、時を超えた兄弟のつながりというもののなかどつかはわからないけれど。

千洋が望み、僕にしか叶えられないことはわかった。

「……いいよ」

僕はゆっくりと立ち上がった。

背中に千洋の視線を感じる。その部分だけ、肌がぴりぴりと震えているようだった。

「連れてきてあげるよ」

ありがとうという声が、もう一度聞こえた。

Replica(やさしい嘘)(後)

病室に戻ると、僕はしばらく父と由布子さんのやりとりを眺めていた。

「千洋、どうしたの？ 黙りこんじゃって」

由布子さんが心配そうに訊いてくる。僕はじっと彼女を見つめた。そして。

「おふくろ」

僕の口から、するりと言葉がこぼれ落ちた。

父が目を大きく睜つたのが視界の隅でわかった。

「話があるんだ。……それで」

僕はちらりと父を見た。

千洋が父のことをなんて呼んでいたか、わからなかった。たけど、すぐに助け船は出された。

「宗さん」

やんわりと由布子さんが父を呼んだ。

父は僕と由布子さんを見比べていたが、やがて観念したように立ち上がった。すれ違い様に僕の肩を叩いて。

小さく軋みながらドアが閉まった。

そして、沈黙が襲ってきた。

しばらくの間、どちらも口を閉ざしていた。

「……ねえ」

沈黙を撃退したのは、由布子さんだった。

「本当の名前は、なんていうの？」

僕ははっと顔を上げた。

しっかりと僕を見つめる、まなざしがあった。

「……宗さんも」

「え？」

「宗さんも、馬鹿ね」

花が咲くように由布子さんの顔が綻ぶ。呆れているような、それでも愛しさに溢れた笑顔。

「最初はね、本当に千洋がいるのかと思った」

強張った僕の手には、由布子さんの手がそつと触れてくる。母の手に似た、けどもつと細くて頼りない、病人の手。

「でも、違うつてわかったわ」

「どうしてですか？」

彼女はくすりと小さく笑った。

「ほくろよ」

「ほくろ？」

「そう。すごくちっちゃいけどね、千洋には右目のすぐ下に泣きぼくろがあったの」

僕の右目の下に、ほくろはない。

「だから、ああ、この子は千洋じゃないんだなって。ねえ、名前を教えてくれる？」

由布子さんがぎゅつと手を握ってきた。

「あの子の弟の名前、知りたいの」

僕は由布子さんの手を握り返しながら、答えた。

「万海かずみです」

「かずみ？」

「幾千万の万に海で、『かずみ』です」

この名前は父がつけた。

「そう」

万海と、由布子さんの唇が音を伴わずに動く。

やがて彼女は、ふんわりと微笑んだ。

「素敵な名前ね」

窓の外はすっかり暗くなっていた。夜の闇に覆われ、漆黒に塗り

潰されている。

廊下には明かりが灯され、千洋は長椅子に座ったまま待っていた。僕に気づくと、弾かれたように顔を上げた。

本当だ。右目のすぐ下に、うつすらとほくろがあった。

「……由布子さん、さつき」

「ああ」

「わかってたみたいだ」

由布子さんは最期まで笑っていた。

もしかしたら、息子が迎えにきていることも知っていたのかもしれない。

「……万海っていうんだよな」

ぽつりと千洋が言った。

「知ってたんだ」

「親父に教えてもらったんだよ。弟の名前は、俺の意味が通じるんだって」

千洋は目を細めた。

生きている人間そのものの姿に、僕は、まるで夢を見ているような錯覚に捉われた。

死んでいるだなんて、全然わからないのに。

「……ホントに」

「もういいよ」

僕は首を横に振った。

「さんざん聞いたし」

「……そっか」

千洋は小さく笑った。僕もつられて笑い返した。

「そろそろ行くよ」

千洋は立ち上がると、僕のすぐ傍らへと片手を差しのべた。まるで、だれかの手を取るように。

「おふくろ」

千洋がそう呼びかけると、だれもないその場所の空気が滲んだ。

和紙に描いた絵を水に浸けてぼやかしたような、小柄な人影が浮かび上がる。

由布子さんだった。

陽炎のように揺らめく彼女は、微笑み、千洋の手に自分の手を重ねた。

ふたりの手が触れ合う。

その瞬間、僕の視界が白く染まった。

溢れる光のなかで、ふたりが並んでどこかへ歩いていく。

一度だけ振り返って、もうそのあとは止まらずに。

それが僕の見た、ふたりの最後の姿だった。

どこまでも広がる、鮮やかな青。

学校の夏服に身を包んだ僕は、額に掌を翳し、まぶしい空を見上げた。由布子さんの葬儀の日、天気は気持ちいいくらいの快晴だった。

「ここんところ、ずっと晴れてるわね」

隣に立った母が、同じように空を見上げて呟いた。

身寄りのなかった由布子さんの葬儀の喪主は、父が務めていた。

「今年は暑いかな」

「そうねえ」

去年の夏が涼しかったから、今年は一段と太陽が近いのかもしれない。そんな気がしてならなかった。

少しでも視線を落とすと、空に向かって一筋の黒い煙が立ちのぼっている。由布子さんの遺体は今、焼かれていた。

「あれに乗って、行くのかしら」

「え？」

「遺体を焼いた煙に乗って、人の魂は上に行くのかしらね」

違う。

彼女はもうとつくに、あの空の向こうにいる。

僕は流れていく煙を見つめた。

「ねえ、母さん」

「ん？」

「僕があの人に会うの、別になんとも思わなかった？」

あの日。

父が僕をだれに会わせようとしていたのか、母は知っていた。

「なんとも思わなかったっていえば、嘘になるわね」

答えは正直に返ってきた。

「だけど」

「……だけど？」

ひと呼吸置いて、母は言った。

「嘘でもいいから最後に何かしてあげたいってお父さんに頭下げられて、『うん』って言うしかなかったわ」

僕は母の横顔を見た。

煙を見上げたまま、母は続けた。

「お父さんがそこまでするなんて、はじめて見たわ。だからね、お母さん、頷いたの」

せめて、幸せな夢のなかで送ってやりたかった

棺の中で花に埋もれて眠る由布子さんを見つめながら、父はそう言っていた。

結局、あいつは何もかもわかってたみたいだけどなしてやられたと、笑っていた。

黒い煙はゆるやかに、上へ上へとぼっていく。

まるでふたりへのだれかの想いを、彼らの許へ届けようとするように。

遠く、空の彼方へと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8933a/>

Replica ~ やさしい嘘 ~

2010年10月8日13時44分発行